国立国語研究所学術情報リポジトリ

Distinction between focus particles sae and desae

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊地, 康人, KIKUCHI, Yasuto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002017

『日本語科学』6（1999年10月）7-31　〔研究論文〕

サエとデサエ

菊地　康人
（東京大学）

キーワード
サエ，デサエ，〈意味上のとりたての対象〉，〈P対照〉，〈N対照〉

要　旨

サエとデサエの使い分けについて考察する。

まず1節で本稿の課題について略述した後，2節では，サエ／デサエの最も基本的な〈極限提示〉〈類推〉の用法を分析する。3節では，〈意味上のとりたて（対照）の対象〉が〈述語を含む句〉である〈P対照〉の場合と，それが〈名詞句だけ〉である〈N対照〉の場合とを区別する。その上で，4節では《P対照ならサエ，N対照ならデサエ》という使い分けの原理を提示し，5節ではこれが〈極限提示〉〈類推〉用法のガ格・ヲ格のとりたてについて成り立つことを見る。6-7節では，この確認を兼ねて，P対照の文として成り立つ条件，N対照の文として成り立つ条件をそれぞれ詳しく検討するとともに，一種の例外として，本来はN対照のはずの文の〈P対照化〉，その逆の〈N対照化〉に触れる。8節では〈累加〉〈十分条件性の強調〉をあらわす周辺的用法を，9節ではガ格・ヲ格以外のとりたてを見るが，これらの場合も上の原理が基本的に成り立つことが確認できる。10節では，デサエのデは《〈意味的に，直前の語句をとりたてる〉ことを明示する》ものだと結論し，あわせて，とりたての研究の中での本研究の位置にも触れる。

1．はじめに

サエとデサエは，どちらを使ってもよい場合もあり，一方しか使えない場合もある。たとえば，

(1)　この力士は力がある。好調なときは横綱［サエ／デサエ］投げ飛ばす。(75-19/75-23)[1]

(2)　彼女の顔には，涙［サエ／*デサエ］浮かんでいる。(93-5/4-90)

(3)　僕［*サエ／デサエ］疲れたのだから，君はどんなに疲れたことだろう。(26-68/97-1)

の (1) ではサエ／デサエともに使えるが，(2) ではサエ，(3) ではデサエしか使えない。

本稿は，サエとデサエの使い分けの原理を捉えようとするものである。主な論点に入る前に，はじめに二点確認しておこう。まず，デサエが使えるのは，(1) (3) のような名詞句の後や，

(4)　北海道から［?サエ／デサエ］飛行機に乗れば一時間で着く。(11-82/91-8)

のような名詞句＋格助詞の後に限られ，これ以外の語句に付く場合には，一般に

(5)　横綱を投げ飛ばし［サエ／*デサエ］する。

のように，デサエではなくサエが使われる（詳細は9節）。第二に，名詞句に付く場合でも，

(6)　金［サエ／*デサエ］あれば解決する。

のように「……サエ……ば（たら）」の形で《ある結果をもたらすための条件は当該の事柄だけで

十分である》ことをあらわす〈十分条件性の強調〉とでもいうべき用法の場合は，サエしか使えない。そこで，サエとデサエの使い分けが問題になるのは，名詞句（＋格助詞）に付く場合で，かつ，(6) ではなく(1)-(4) のような〈極限提示〉や〈類推〉の用法の場合ということになる。これらの場合にサエとデサエをどう使い分けているのかを明らかにするのが，本稿の課題である。

両語の使い分けをめぐっては，先行研究として市川(1989)と丹羽(1995)に――上に確認した二点も含めて――それぞれ幾つかの事実あるいは傾向についての指摘があり，有益ではあるが，それらも，きわめて本質的な原理を捉えるには至っていない。だが実は，サエとデサエの使い分けの中核的な部分は，ごく簡単な原理で捉えられると見られ，本稿はそれを提示する。

2．サエ／デサエの用法の分析――〈極限提示〉〈類推〉用法の場合

まず，問題の〈極限提示〉ないし〈類推〉のサエ／デサエの用法を多少詳しく分析してみよう。次節までは，サエとデサエの使い分けについてはとりあえず問題にせず，一括して扱うこととし，例文もサエ／デサエのうち自然なほうの一文だけ（両方使える場合も一方だけ）掲げる。

(7)　子供デサエ知っている。

という文を例にとると，(7) の話手は，「一般に子供は大人よりも知識が少ない」という了解のもと，「世の中のことをあまり知らないはずの子供が知っている」ということは，いわば〈特段の事柄〉だと捉えている。「X(デ)サエY」は，概略〈XとYが結びつく必然性が小さい〉という含みをもつ表現であり[2]，“「子供」と「知っている」ということは結びつく必然性が小さいのに，それが結びついているという意味で特段の事柄である”と，(7) では捉えているわけである。

このように(デ)サエを使って〈特段の事柄〉として述べ立てることの趣旨は，大別して二通り考えられる。一つは，たとえば

(8)　驚いた。何と子供デサエ，あの両家の不仲は知っていた。

のように「何と，そこまで及んでいる！」という趣の意外感・感慨を打ち出すことである。(デ)サエが意外感をあらわすという指摘は沼田(1986,pp.181-2)など先行研究にも見られるが，

(9)　あの頃は苦しかった。自殺サエ考えたよ。

のように自分自身のことを感慨をこめて述懐する場合もある。(9) では，「自殺を考えた」は「そこまで追い詰められた」という〈特段〉どころか〈極限的な事柄〉であり，(8) でも，いくら不仲でも幼い子供にぐらい察知されるべきではないのに「行き着くところまで行き着いている」という，やはり〈極限的〉な趣である。このように，その事態がある種の尺度における〈極限的な事柄〉であるとして意外感や感慨とともに提示する(デ)サエを，〈極限提示〉の用法と呼ぼう。

〈特段の事柄〉として述べ立てるもう一つの趣旨は〈類推〉を導くことである。つまり (7) には，

(10)　子供デサエ知っている。→ まして，大人は知っていて当然だ。

という類推を導く働きがある。「子供」と「知っている」という〈必然性の小さい，特段の結びつき〉デサエ成立するのだから，「大人」と「知っている」という〈必然性のより大きい，普通の結びつき〉は当然成立するという類推である。さらに，場合によっては「それなのに，あの人は知らなかった」といった含みをもつこともある。

〈極限提示〉を趣旨とするか〈類推〉を趣旨とするかは，語用論的効果の違いにすぎず，根は共通であろう。実際，両方の趣旨をもつ場合も多い。〈極限的な事柄〉の成立を述べ立てる以上，“その尺度における非極限は当然成り立つ”と〈類推〉させる効果をあわせもつことにもなる。

ただし，単に〈類推〉を趣旨とする場合は——もちろん極限を述べ立てて非極限を類推させることが多いものの——，実は，述べ立てる事柄が極限的である必要は必ずしもない。たとえば

(3・再) 僕デサエ疲れたのだから，君はどんなに疲れたことだろう。

は，大勢の人々の中で「僕」が最も疲れにくい（たとえば最も頑丈だ）というケースでなくても，「僕」が「君」より数段頑丈でさえあれば，使われうる。(デ)サエについては「極端な場合を提示して類推させる」といった記述をよく見るが，〈類推〉自体が趣旨の場合は，〈極限的な事柄〉でなくても，いわば〈特段の事柄〉といえる程度の事柄でさえあればよいのである。

こうした微細な但し書きは必要であるが，〈類推〉も〈極限提示〉も基本的には一つのもので，

(デ)サエの最も基本的な用法は，《極限を提示して，類推を導く》ことである

と見てよかろう。そして，単に〈類推〉だけを趣旨とする場合に限り，〈極限〉という制約がやや緩められて〈特段の事柄〉程度でも成り立つ，と捉えられるかと思われる。

さて，(デ)サエの文は，〈類推〉を趣旨とする場合はもちろん，〈極限提示〉を趣旨とする場合でも上述のように〈類推〉効果を伴うので，その文で直接述べられている〈当該の事柄〉とともに，類推の対象となる〈対照される事柄〉についても目を向ける働きをもつ。(7) でいえば，〈当該の事柄〉は〈子供〉，〈対照される事柄〉は〈子供以外〉（最も普通の解釈は〈大人〉）であり，(7) は，〈子供〉と〈大人〉を，次の (A) または (B) のように対照していると見られる（(A) は〈類推〉，(B) は〈極限提示〉を趣旨とすると見た場合。以下同様）。

(7') (A)：〈子供〉デサエ知っている。まして〈大人〉は知っている。

(B)：〈大人〉が知っているという程度にとどまらず，〈子供〉デサエ知っている。

以上見てきたことを，次のようにまとめておこう。

[I] (デ)サエの基本的な用法は，〈当該の事柄＝何らかの尺度における極限的な（特段の）事柄〉を述べ，あわせて〈対照される事柄＝その尺度における極限的（特段）ではない事柄〉についての類推を導くことである[3]。

3．〈意味上のとりたて（対照）の対象〉——〈N対照〉と〈P対照〉

ただし，[I] でいう〈事柄〉とは，いつも「子供」「大人」のような名詞句だとは限らない。

(11) こんなに働きづめでは，体サエこわす。

は，〈体〉以外の何かをこわすこととの対照なのではなく，次のように捉えるべきである。

(11') (A)：〈体をこわす〉ということサエ起こる。まして〈……〉。

(B)：〈……〉という程度にとどまらず，〈体をこわす〉ということサエ起こる。

つまり〈体をこわす〉が〈当該の事柄〉であり，〈対照される事柄〉（＝(11') の〈……〉）としては，たとえば〈心のゆとりを失う〉〈ストレスがたまる〉などが想定される。〈体をこわす〉は，心身の様々な状態が並ぶ尺度の中の極限的なことと捉えられているわけである。なお (11) は，

(11”) こんなに働きづめでは，体をこわしサエする。

のように，名詞句ではなくコトを問題にしていることを明示した形で述べることもできる。

(デ)サエに限らず，とりたてを捉えるには，①〈形の上でのとりたての対象〉(=とりたて詞の付く語句)，②〈意味上のとりたて（対照）の対象〉(=とりたて詞の意を添えて他の事柄と対照を行う，そのレベル）の両面に目を向ける必要がある。名詞句をN，述語句（述語を含む一定の範囲の句）をPとすると，(7)-(7’)は，①がN，②もNの場合；(11)-(11’)は，①はN，②はPの場合；(11”)-(11’)は，①がP，②もPの場合である。①がPなら，②もPとなるが，①がNの場合は，②についてはNの場合とPの場合とがあるわけである。この点に留意した上で，ここでは②の〈意味上のとりたての対象〉のほうに注目して，②がNである場合を〈N対照（Nレベルの対照)〉，②がPである場合を〈P対照（Pレベルの対照)〉と呼ぶことにしよう。(7’)(の意をもつ(7)) はN対照，(11’)(の意をもつ(11) (11”)) はP対照である[4]。なお，先程の〈XがYと結びつく必然性が小さい〉という述べ方はN対照の場合の述べ方であって，P対照の場合も含めれば〈“X－Y”という結びつきが起こる必然性が小さい〉と述べるべきことになる。

4．サエとデサエの使い分けの基本原理

さて，本稿は，サエとデサエの使い分けは次のように捉えられると見る。

［Ⅱ］　サエとデサエの使い分けの基本原理：《P対照ならサエ，N対照ならデサエ》が使われる。両方に解釈できる場合はサエ／デサエどちらも使える。

上で，①〈形の上でのとりたての対象〉と②〈意味上のとりたての対象〉を区別したが，①がPの場合は，②についてもP対照となり，この場合は前述のようにサエが使われるので，当然，［Ⅱ］に合う。問題は，①がNの場合のサエとデサエの使い分けであるが，これは，②がP対照であるかN対照であるかによって決まる，というのが［Ⅱ］の眼目である[5]。言い換えれば，

［Ⅱ’］「XサエY」は「“X－Y”ということサエある」という趣旨，

「XデサエY」は「Xの場合デサエ，なおYが成立する」という趣旨の文である。

というわけである。以下，この基本原理を，（ⅰ）〈極限提示〉〈類推〉用法でガ格・ヲ格がとりたてられる場合(5-7節)，（ⅱ）その他のいわば周辺的な用法でガ格・ヲ格がとりたてられる場合（8節)，（ⅲ）ガ格・ヲ格以外がとりたてられる場合（9節)，という順序で見ていく。

5．基本的な場合についての例証

まず，基本的な幾つかの例について，上の基本原理［Ⅱ］が成り立つことを示そう。

(2・再) 彼女の顔には，涙［サエ／*デサエ］浮かんでいる。(93-5/4-90)

では，涙以外の何かが浮かんでいるわけではもちろんない。つまり，「涙」を置き換えた「……が浮かぶ」ということが，対照される内容として成り立つ，というケースではない。このように，名詞句の置き換えがきかない（=対照される内容として，当該の名詞句の部分だけを他の適当な名詞句に置き換えた内容が成立しない）場合は，N対照ではありえず，P対照としてのみ成立する。(2) は，〈涙が浮かんでいる〉全体で感情という尺度の極限をあらわすP対照の文である。

(12)　涙［サエ／*デサエ］浮かべている。

も，同様にP対照の文である。(2) はガ格（「涙が」），(12) はヲ格（「涙を」）のとりたてであるが，どちらの場合も，P対照の場合は，このようにサエがなじみ，デサエはなじまない。他方，

(3・再) 僕［*サエ／デサエ］疲れたのだから，君はどんなに疲れたことだろう。(26-68/97-1)

は「……が疲れた」の……を置き換えて対照するN対照の文であり，サエでなくデサエがなじむ。

ただし，〈名詞句の置き換えがきけばN対照〉というわけでは必ずしもない。

(9・再) あの頃は苦しかった。自殺［サエ／*デサエ］考えたよ。

では，「自殺を考える」の「自殺」の部分を置き換えた「夜逃げを考える」「[盗みを働くこと] を考える」などとの対照も一応は想定できるものの，(9) の趣旨はそうではなく，「“自殺を考える”ことサエあった（それほど苦しかった)」ということだと見るのが自然である。つまり，〈さまざまな「xを考える」と対照して，そのxを「自殺」とした場合についてもなお「考える」が成立した〉というN対照の発想ではなく，苦楽の様々な状態を並べた尺度の中で――その中には「欝欝とした日々を送る」「人生に絶望する」のように述語の異なるものも含まれる――，「自殺を考える」をその極限として捉えたP対照の文だと見るべきものである。そもそも，この場合，「xを考える」という述語を固定した狭い枠の中で極限性を示そうとすることがなじまず，「苦楽のさまざまな状態」という広い範囲の中で捉えてこそ意味をもつのである。(9) でデサエよりサエがなじむ所以である。この文がN対照の解釈を(も)自然な解釈としてもつためには，

(9’) 自殺［サエ／デサエ］考えたのだから，当然，夜逃げは考えたよ。

のように，まさに当該の名詞句を置き換えた内容と明示的に対照される文脈が必要であろう。

次の場合は，P対照としてもN対照としても成り立つケースで，サエもデサエも使える。

(1・再) この力士は力がある。好調なときは横綱［サエ／デサエ］投げ飛ばす。(75-19/75-23)

(1)では，「横綱を投げ飛ばす」の「横綱」を「大関」や「関脇」と置き換えた文が容易に想定でき，それとの対照で――つまり，「xを投げ飛ばす」のxの極限として「横綱」を入れ，その場合デサエ「投げ飛ばす」を充足するのだと――捉えるなら，もちろんN対照の文として成り立つ。一方，「横綱を投げ飛ばす」という句全体を，単純に相撲の強さ（あるいは力の強さ）という尺度での極限と捉え，そういうことサエあると述べているのだと見れば――この場合は，たとえば「横綱を押し出す」や「横綱と互角に戦う」とも暗黙のうちに対照されていると見られる――，P対照の文ということになる。両様に解せ，サエ・デサエともに使えるケースである。(1) が，(9) と違って，単独でも（=「まして大関は軽い」などの文脈を伴わなくても）N対照の文として成り立つのは，「xを投げ飛ばす」という枠の中で述べることに相応の意味があり，また「横綱」という名詞句が他の相撲界の地位（「大関」以下）との対照を想起させやすいためであろう。

なお，以上のように，名詞句の置き換えがきく場合でも，文脈や，語句の意味上の（あるいは現実社会の）要因によって，N対照の文としての成り立ちやすさに差がある。ここでは，その詳しい検討には踏み込まないが，とりあえず，以上に見たことを概略次のように整理しておこう。

［Ⅲ］　N対照の（デサエの）文が成り立つためには，述語を限定した枠の中で名詞句を置き換えて対照することに意味があり，その対照が想定しやすい（名詞句を置き換えた句が成立す

る上，それが，対照内容として明示されているか，想定されやすい）ことが必要条件である。（ただし，この条件を満たす場合でもＰ対照の解釈があわせて可能な場合もある。）

(9) は，名詞句の置き換えはきくものの，［Ⅲ］を満たさないのでＰ対照の文としてのみ成立，(9') や (1) は［Ⅲ］を満たすのでＮ対照の文として成立するが，あわせてＰ対照の文としても成立するケースだと見られる。一方，後述のようにＰ対照の文として成り立つための条件というのも別にあり，(3) はこれには合わないが，上の［Ⅲ］は満たすので，Ｎ対照の文としてのみ成立する。

以上で基本原理［Ⅱ］は概ね示せたであろうが，以下に例と補足説明を加える。以上の例も以下の例も，いずれも，〈類推〉〈極限提示〉用法で，ガ格・ヲ格がとりたてられた場合である。

［Ｐ対照で，したがって サエのほうがデサエよりもなじむ場合］

(13)　高熱［サエ／*デサエ］ある体をおして出勤した。

(14)　秘書［サエ／*デサエ］いるいいご身分（88-5/3-90）

(15)　良心のかけら［サエ／*デサエ］ない悪徳政治家

(16)　時には熊［サエ／*デサエ］出るという僻地（86-10/37-55）

(17)　人生も半ばを過ぎ，頭の毛［サエ／*デサエ］薄くなってきた。(87-8/17-72)

(18)　閑古鳥［サエ／*デサエ］鳴く（鳴かない）零落ぶり（以上，ガ格）

(9・再）あの頃は苦しかった。自殺［サエ／*デサエ］考えたよ。

(11・再）こんなに働きづめでは，体［サエ／*デサエ］こわす。(60-26/14-74)

(19)　彼は薬［サエ／*デサエ］飲まない。病気を治す気があるんだろうか。(92-5/30-62)

(20)　そっぽ［サエ／*デサエ］向いている。（以上，ヲ格）

(21)　いやなやつだ。顔［サエ／*デサエ］見たくない。（ガ格ともヲ格とも見られる例）

なお丹羽（p.38）は，デサエは多くはガ格のとりたてに使われるとした上で，ただし存在や出現をあらわす文ではサエが使われやすいと観察している。本稿の立場からは，存在や出現をあらわす文は，文全体が〈まるごと述べる〉（菊地1997,p.102)タイプの文（≒いわゆる新情報の文）であるため，「こういうことサエある」というＰ対照の文になりやすい，として説明できよう。上例 (2) と (13)-(15) は存在，(16) は出現をあらわす文で，丹羽の観察に合う例である[6]。もっとも，(17) (18) のように，ガ格のとりたてで，存在や出現をあらわさない文でも，Ｐ対照ならサエが使われるし，すぐ後に見る (24) のように，存在をあらわす文でもＮ対照ならデサエのほうがなじむので，本質的な要因は〈存在・出現をあらわすか否か〉ではなく〈Ｐ対照かＮ対照か〉である。

［Ｎ対照で，したがって デサエのほうがサエよりもなじむ場合］

(3・再）僕［*サエ／デサエ］疲れたのだから，君はどんなに疲れたことだろう。(26-68/97-1)

(22)　ヒロシ［*サエ／デサエ］家を建てた。タカシとしては立場がない。(33-61/98-0)

(23)　あいつ［*サエ／デサエ］外車を持っている。俺もほしいなあ。(27-66/99-1)

(24)　「あの店，ハムあるかな」「大丈夫。生ハム［?サエ／デサエ］あるよ」(38-49/57-33)

(25)　あんなやつ［*サエ／デサエ］，いなくなればさびしい。(21-71/87-11)（以上，ガ格）

(26)　あの会社は，ケメコ［*サエ／デサエ］採用したのに，どうして私を採用してくれないの。(33-61/93-3)

(27)　あの小屋［*サエ／デサエ］，建てるのに一千万円もかかった。(25-69/95-3)

(28)　犬猫［*サエ／デサエ］，殺せば寝覚めが悪いだろう。(25-69/91-5)（以上，ヲ格）

(3) と (22) (23) (26) では，「僕」と「君」のようにNレベルでの対照が明示されていて，デサエがなじむ[7]。(24) も，「ハム」と「生ハム」のN対照と読むのが自然なので，デサエのほうがよい[8]。(25) と (27) (28) は，従属節中からの（(27) なら「[あの小屋を建てる] のに一千万円もかかった」の下線部の）とりたてで，N対照性（および後出の主題性）が強く，やはりデサエがよい。

［P対照／N対照の両解釈が可能で，したがって サエ／デサエ ともに使われる場合］

(29)　おかゆ［サエ／デサエ］喉を通らない。(85-10/70-27)

(30)　戦争には少年［サエ／デサエ］かり出された。

(31)　大男［サエ／デサエ］泣き出す重労働（以上，ガ格）

(1・再) この力士は力がある。好調なときは横綱［サエ／デサエ］投げ飛ばす。(75-19/75-23)

(32)　残飯［サエ／デサエ］食べた。

(33)　道楽のためなら，女房［サエ／デサエ］質に入れる。

(34)　恩人［サエ／デサエ］裏切る男（以上，ヲ格）

(35)　平仮名［サエ／デサエ］読めない。(ガ格ともヲ格とも見られる例)

以上いずれも，P対照／N対照の両解釈が可能で，サエもデサエも使える。

(36)　プール［サエ／?デサエ］ある大邸宅 (79-16/22-72)

(37)　寝る時間［サエ／?デサエ］ない。(99-0/22-71)

は，「プールがある」「寝る時間がない」という句全体で，大邸宅である様子や多忙さをあらわすP対照の文と見る（サエを使う）のが自然だが，「何がある大邸宅か」「何をする時間がないか（寝る時間デサエないのだから，……する時間などない)」を問題にする文脈でならばN対照としても成り立つ（デサエも使える）であろう。なお，先のP対照の例のうち (19) を少し変えて

(19') 医者からもらった薬［サエ／デサエ］飲まない。(77-16/77-21)

とすると，デサエも使えるようになるが，これは，連体修飾語句を付けることで，たとえば〈妻が薦める保健薬〉などと対照するN対照の読みも生じるからだと見られ，本稿の分析と符合する。

以上，《P対照ならサエ，N対照ならデサエ》という先の基本原理［II］が成り立つことを見てきたが，以下6-7節では〈P対照／N対照の文はそれぞれどのような条件で成立するか〉を見ておこう。あわせて，本来はN対照のはずの文の〈P対照化〉とその逆の〈N対照化〉にも触れる。

6．P対照の文の成立条件と，〈P対照化〉

6.1．P対照の文の成立条件

(38)　ヒロシ［*サエ／デサエ］家を建てた。(＝(22) の第一文)

は，N対照，つまり「『xが家を建てた』のxを『ヒロシ』デサエ充足した」という文であり，サエは不自然で，デサエのほうがなじむ（(22) は「タカシ」との対照なのでN対照性が一層明瞭だが，(38) 単独でもこういえるだろう)。だが，この文を少し変えて，

(39)　一回りも下の末弟［サエ／デサエ］家を建てた。(53-41/94-5)

とすると，デサエはもちろんよいが，サエも不自然ではなく感じられる。それは，(39) の場合，「『x が家を建てた』の x を『一回りも違う末弟』デサエ充足した」というN対照の解釈とともに，文全体で「社会的成功という点で，兄は一回りも下の末弟に遅れをとるところまで立ち至った」という趣のP対照の解釈も可能だからである。つまり，(38) (39) は本稿の基本原理［Ⅱ］に符合するのだが，なぜ (38) はP対照の文として成り立たず，(39) はP対照の文として(も)成り立つのか。(39) では，「一回りも下の末弟が（先に）家を建てた」という内容が「兄が社会的な成功において遅れをとる」ということの一種の極限であることが，容易に読みとれるのに対し，単に「ヒロシ」を用いた (38) では，そうしたPレベルの極限性が見てとれないためだと考えられる[9]。

(40)　あいつ［*サエ／デサエ］外車を持っている。(＝(23)の第一文)

(41)　入社後間もない若造［サエ／デサエ］外車を持っている。(58-34/97-2)

(42)　Aさん［*サエ／デサエ］怒った。(32-57/97-1)

(43)ア　あの温厚なAさん［サエ／デサエ］怒った。(53-41/95-3)

　　イ　ついに(は)Aさん［サエ／デサエ］怒った。(63-29/68-28)

(40)vs.(41)，(42)vs.(43) も類例である。いずれもデサエは使えるが，サエは (40) (42) では使いにくく，(41) (43) なら使える。これは，(41) では「入社後間もない若造が外車を持っている」ということが，Pレベルでの極限性をもつ内容――「人々が若いうちから贅沢をするようになった」という趣の一種の極限――として見てとれるのに対し，(40) の「あいつ」ではそうした極限性は見てとれないため；同様に (43) ではアのように「あの」「温厚な」を添えたり，イのように「ついに(は)」を添えたりすることで，「Aさんが怒る」ということのPレベルでの極限性が読みとれるのに対し，(42) ではそうではないため，と見られる。以上を次のように整理できよう。

［Ⅳ］　P対照の（サエの）文が成り立つためには，当該の事柄のPレベルでの極限性（それが，何らかの尺度での極限的な事柄であること）が見てとれることが必要である。

具体的には，当該の名詞句の属性や事態の性質を浮かび上がらせる語句――上の「一回りも下の末弟」「若造」「温厚な」や「あの」「ついに(は)」など――が含まれる場合，Pレベルでの極限性が見てとりやすく（サエの文が成り立ちやすく）なる，という傾向が指摘できよう[10]。

(38) (40) (42) でサエがなじまないことについて，上に見たことは，また次のようにも述べられよう。たとえば，(38) のサエの文（「ヒロシサエ家を建てた」）を，「ヒロシ」を全く知らない人が聞かされた（あるいは，他人の会話をたまたま第三者として耳にした）としよう。この場合，聞手は一種の違和感を感じるだろう。その違和感とは，それが〈(Pレベルでの)極限的な事柄〉だということがきちんと伝わってこない，いわば〈“極限性”の不明瞭感あるいは説明不足感〉とでもいうべき違和感――「私はヒロシを知らないのだから，ヒロシが家を建てたということが何を意味するかわからないではないか！」という不足感――である。

では，(38) (40) (42) で，デサエの文のほうはなぜ成り立つのか。やはり「ヒロシ」を知らない人が「ヒロシデサエ家を建てた」と耳にしたとしよう。この場合は，「ヒロシ」を知らなくても，このデサエの文を聞けば，「こう述べている以上は，ヒロシは家を建てることと縁遠いはずの（その必然性の小さい）人なのだろう」と，いわば逆向きに推測して文意をとることができ，先程のよ

うな不足感は生じない。つまり，デサエの場合は，その極限性（を物語るだけの「ヒロシ」の属性等）が明瞭に示されなくても，それを逆向きの推測で補って，文として成り立たせることができるのである。この点がサエの文とデサエの文の成立条件の違いだと見られる。

サエの場合とデサエの場合のこうした違いは，つまるところ，P対照かN対照かの違いによると考えられる。デサエの場合は，「XデサエY」のXの部分だけが対照の対象なので，Xについての文脈外の了解が何もなくても，聞手は「こう述べている以上は，Xは，本来Yと結びつく必然性が小さい性質（そのような，Nレベルでの極限性あるいは〈特段〉性）をもっている」と推測でき，文が成立するわけである。一方，サエの場合は，Pレベルでの対照なので，その性格等がよく了解されていない名詞句X（とくに固有名詞等）について「XサエY」と述べられた場合には，「Xが（を）Y」であるということがどのような意味で極限性をもつのかが十分にはつかめないことになり，前掲［Ⅳ］を満たさず，文として成立しにくくなるのである。

6.2. 例外的な〈P対照化〉——〈意味上のとりたての対象〉の拡大

ところで，〈形の上では一つの名詞句だけをとりたてて示すが，内容的にはPレベルで捉えている（P対照である）〉という〈形と意味の不整合〉——第3節の初めで〈①はN，②はP〉と述べたケース——がしばしば起こるのは，とりたてのいわば宿命であろう。

(11・再) こんなに働きづめでは，体サエこわす。

(44) 体ハこわしたが，一命ハとりとめた。

などは，内容的にはPレベルのこと（P対照）である。これらは，

(11”・再) こんなに働きづめでは，体をこわしサエする。

(44’) 体をこわしハしたが，一命をとりとめハした。

のように，形の上でもPレベルのとりたてとして示す述べ方もできるにせよ，やはり (11) (44) のように一つの名詞句だけをとりたてる形で述べるほうが文として自然である[11]。こうした不整合は，いわばとりたての本質に不可避的に付随する現象だと見られよう。そうである以上，

(1・再) この力士は力がある。好調なときは横綱［サエ／デサエ］投げ飛ばす。(75-19/75-23)

(39・再) 一回りも下の末弟［サエ／デサエ］家を建てた。(53-41/94-5)

のように名詞句の置き換えがきき，N対照の解釈が成り立つ場合であっても，あわせてP対照の解釈も成り立つ，ということもあってよいことになろうし，事実，多く見られるわけである。

(11) や (1) (39) は，先の［Ⅳ］を満たすのでP対照の文として成立するわけだが，さらに，場合によっては，［Ⅳ］を必ずしも明瞭には満たさなくてもP対照として捉えられる，と見られる場合がある。たとえば，次例は基本的にはN対照と読むのが自然なはずだが，サエを許す人がいる。

(45) 「とかげだけは飼えないわ」「あなたは蛇［?サエ／デサエ］飼うのに，どうしてなの」(45-48/70-24)

(46) 「彼は空手で木を割っちゃうんだって？」「うん，石［?サエ／デサエ］割るそうだ」(52-37/60-36)

(45) でいえば，「xを飼う」のxの極限値として「蛇」を入れたと読むN対照の読みは問題なく

成り立つが，一方，「蛇を飼う」という句全体（Ｐレベル）で何らかの尺度上の極限性が読みとれるかは微妙である。先の［Ⅳ］を明瞭に満たすケースではないが（また，かりにＰレベルでの極限性が読みとれそうに見えても，所詮は「何を飼うか」の話であり，事実上はＮレベルの尺度にすぎないとも思われるが），それでもＰ対照のように読み込んでサエを使う人がいるということだろう。これは，上述の〈とりたてにおける形と意味の不整合〉がどのみち不可避なことから，いわばややルースにＰ対照としての把握が広く行われたケースである（それが行われた場合にサエが許される）と見られる。このように，本来はＮ対照のはずの文で，［Ⅳ］を必ずしも明瞭な形では満たさないのに，Ｐレベルの対照をしているかのような捉え方が行われたと見られること（より具体的には，デサエが期待されるケースでサエが使われること）を〈Ｐ対照化〉――〈意味上のとりたての対象〉のＰレベル化（拡大）――と呼ぼう。一種の例外的現象だが，その背景には上述のように〈とりたての本質として《形と意味の不整合》が不可避であること〉があると見ておきたい。このＰ対照化は，ガ格よりもヲ格のとりたての場合に起こることのようである。これをどの程度許すかには個人差があろうが，とりあえず次のように述べておく。

［Ⅳ'］（特にヲ格のとりたての場合）［Ⅳ］を明瞭には満たさず，Ｎ対照と見られるはずの場合でも，［Ⅳ］を緩めてＰ対照であるかのように捉えることを許す場合がある（〈Ｐ対照化〉）。

７．Ｎ対照の文の成立条件と，〈Ｎ対照化〉

7.1．Ｎ対照の解釈を成り立ちやすくする条件①――類推（二者間の対照）を趣旨とするデサエ

一方，Ｎ対照の文として成り立つ条件は５節の［Ⅲ］で見たが，さらに補う点がある。先の［Ⅲ］は〈Ｎ対照の文として成り立つための必要条件〉であり，これに合ったからといってＮ対照としか解せないわけではなかった（［Ⅲ］を満たしても，なお，Ｐ対照としても解せる場合もあった）が，以下に見るのは〈［Ⅲ］を満たす場合の中でも，特にしかじかの場合はＮ対照と捉えるほうが自然であり，Ｐ対照の解釈は生じにくい〉という条件，つまり〈Ｎ対照の解釈を成り立ちやすくする条件〉である。それらを二つ（これにどの程度従うかにはやはり個人差があろうが）示そう。

［Ⅴ］〈極限提示〉よりも〈類推〉（二者間の対照）を趣旨とする文は，Ｎ対照の文として捉えるのが自然である。

というのが，その一つである。たとえば，次の文（とくに前者）では，サエは使いにくい。

(3・再) 僕［*サエ／デサエ］疲れたのだから，君はどんなに疲れたことだろう。(26-68/97-1)

(47) その試験は，兄さん［?サエ／デサエ］落ちたのだから，弟ではまず無理だろう。(37-54/98-0)

これらは類推を趣旨とする用法で，そもそも「僕」「兄さん」が極限値（「最も頑丈」「秀才」）だという含みは必ずしもない。その意味で，極限性が見てとれないからサエがなじまないのだという説明で一応十分だともいえるが，かりに「僕」「兄さん」が極限的な値で，そうした了解が話手と聞手の間にあるとしても，やはりデサエのほうがなじむ。それは，二者の対照を趣旨とする文だからである（５節でＮ対照の例として見た (22) (23) (26) も同様である。注7も参照）。

ただし，二者間のＮレベルの対照ではあっても，一方の極限性が明瞭に見てとれれば，

(39') 一回りも下の末弟［(?) サエ／デサエ］家を建てたのに，長兄はまだフーテン生活だ。(46-48/94-5)

のようにサエも許されやすくなる。(39') の前半(=(39)) は，極限性が見てとれ，先の［Ⅳ］によりＰ対照の解釈が可能な内容だが，一方，後半の「長兄」との対照からは，［Ⅴ］にしたがってＮ対照としての成立を指向するケースである。筆者の語感ではデサエのほうがよいが，サエも無理ではない。この辺は，いわば先の［Ⅳ］と［Ⅴ］の綱引きであり，その際［Ⅴ］がどのぐらい強い支配力をもつかについての個人差があると見られる。次も，極限性と二者間対照の綱引きの例である。

(9'・再) 自殺［サエ／デサエ］考えたのだから，当然，夜逃げは考えたよ。

7.2. Ｎ対照の解釈を成り立ちやすくする条件②――主題性をもつデサエ

筆者自身の内省では，次のような条件もあるように思われる。

［Ⅵ］ Ｎ対照と解せる文で，当該の名詞句が主題性をもつ場合には，内容的にＰ対照とも解しうる場合であっても，Ｎ対照として成立するほうが自然である。

これに関連して，まず先行研究に触れておく。サエ／デサエの使い分けをめぐっては，デサエと主題性との関連が，市川(pp.6-7,13-15)と丹羽(pp.38-39)によって，それぞれ別々の観点から指摘されている[12]。ただし，両論文とも，基礎的な観察として興味深いが，主題の概念規定や論証が十分行われているわけではない。本稿では，主題を――ハが主題を提示する，という場合と同様に――〈(それについて述べてもおかしくない状況が整っていて,) それについて述べるもの〉(菊地1997, pp.101-2参照) と捉えた上で，デサエと主題性との関係をもう少し詰めよう。

このように主題を捉えた場合，デサエと主題性とは完全には重ならない。まず，「主題性をもつ場合は，サエではなくデサエを使う（主題性→デサエ)」と述べるのは，強すぎる。たとえば

(17・再) 人生も半ばを過ぎ，頭の毛［サエ／*デサエ］薄くなってきた。(87-8/17-12)

は，それまで「髪の毛」の話をしていた（その場の主題たりうる状況が整っている）としても，内容的にＮ対照とはとりにくいので，デサエの使いにくいケースである。一方，逆に，「デサエを使う場合は，主題性をもつ（デサエ→主題性)」という述べ方も，あてはまらない場合がある。

(24・再)「あの店，ハムあるかな」「大丈夫。生ハム［?サエ／デサエ］あるよ」(38-49/57-33)

(48) Ｚ君の無礼には，あの温厚なＸさん［サエ／デサエ］怒っていた。(43-42/98-2)

(49) そんなことは，子供［?サエ／デサエ］知っている。(28-60/96-4)

などでは，それまで「生ハム」「Ｘさん」「子供」の話をしていたわけではなく，これらの名詞句が唐突に出てきた場面でも，デサエが使える[13]。

このように本稿の見るところでは，デサエ（が使われること）と，主題性（をもつこと）とは，互いに必要条件でも十分条件でもないのだが，やはり互いに関係はある。それを見よう。

実は，「Ｘ(デ)サエＹ」の文は，

①［Ｘ(デ)サエＹ］という全体が（情報構造上の）述部として働き，Ｚという主題について“Ｚについては［Ｘ(デ)サエＹ]”と述べる場合（つまり，Ｘ自体が主題性をもたない場合),

②Xを主題として，“XについてはY”ということを(デ)サエの趣を添えて述べる場合，
の二つの場合があると見られる。次の (48') は①，(50) は②の例である。

(48') Z君は困った男だ。Z君の無礼には，あの温厚なXさん［サエ／デサエ］怒っていた。

(50) Xさんは温厚な人だ。だが，そのXさん［?サエ／デサエ］，Aという男には怒っていた。

筆者の内省では，(48') ではデサエとともにサエも使えるが，(50) ではデサエのほうがなじむ。これは，「Xさん」が，(48') では主題性をもたないが，(50) では主題性をもつという違いによると思われる。これを捉えたのが先の［Ⅵ］である。サエとデサエの使い分けに関する第一義的なファクターは，やはり〈P対照かN対照か〉であって主題性ではないのだが，〈N対照と解せる文で，内容的にはP対照とも解しうる場合に，そのP対照としての成立を許すかどうか（デサエとともにサエも使えるか否か)〉というところで，主題性の有無もきいてくるのだと見られる[14]。

(49・再) そんなことは，子供［?サエ／デサエ］知っている。

(51) 子供［??サエ／デサエ］，そんなことは知っている。

のうち，(49) よりも (51) のほうがサエを許しにくい[15]のも同様の理由による。なお，5節の (25) (27) (28) のような従属節からのとりたての場合も，主題性をもちやすいのでN対照を保つ傾向が強い（デサエがなじむ）ということだと見られる。

以上，［Ⅳ］-［Ⅵ］で見てきたことを概略的にまとめると，次のようになる。

［Ⅶ］ 名詞句の置き換えがきく場合でも，内容的にPレベルでの極限性が見てとれて，かつ，二者間の対照性や主題性が薄い場合には，P対照の文としての成立が容易になる。

7.3. 例外的な〈N対照化〉——〈意味上のとりたての対象〉の特定化

本小節も，N対照の文の成り立つ一つの場合であるが，前二小節と異なり，本来はP対照としてしか成立しないはずの文がN対照として成立する場合，すなわち先の〈P対照化〉の逆で〈N対照化〉——〈意味上のとりたての対象〉のNレベル化（特定化)——というべき場合である。

次の各例は，ヲ格がとりたてられたものだが，サエ／デサエともに使える。

(52) 切符マニアで，落ちている切符［サエ／デサエ］拾う。(65-28/86-14)

(53) 他人の物［サエ／デサエ］盗む。(64-27/68-27)

(54) かわした約束［サエ／デサエ］破る。(81-16/83-13)

これらは「〈他の何か〉を拾う／盗む／破る」との対照ではなく[16]，内容的にP対照のはずである。サエが使えることは［Ⅱ］の予測通りだが，デサエも使える点が予測に反する。

実は，これらでは，「落ちている切符」「他人の物」「かわした約束」などが，いずれも，すでにそこにある（としてイメージできる）ものであり，〈それに対してどうするか〉が問題になっている。このような場合には，文意自体はP対照であっても，当該の名詞句にいわば〈意味上のとりたての対象〉を絞り，N対照であるかのような捉え方が派生的に可能になるため，例外的にデサエも許される——ということなのではないかと見られる。これを〈N対照化〉と呼ぼう。

［Ⅷ］ 本来はP対照の文でも，付く名詞句が，〈それに対してどうするか〉ということが問題

になるようなもの〔＝既定／所与のもの（としてイメージできるもの）で，述語の行為の対象となるもの〕である場合には，〈意味上のとりたての対象〉を当該の名詞句に特定化することが可能になる（〈N対照化〉）。

(53) (54)では修飾語句「他人の」「かわした」は意味的に希薄だが，これらがあることによっていわば既定性／所与性（そこにあるというイメージのもちやすさ）が高まると見られ，これらの修飾語句を欠いてはデサエは使いにくい。(52) も連体修飾語句を伴う。このように，連体修飾語句の付加によってN対照化が起こり，デサエが使えるようになると見られる場合がある[17]。

なお，ガ格の場合は，［Ⅷ］と並行的なケースは見出せない。つまり，ガ格のP対照の場合，連体修飾語句を付けて「そこにある」というイメージを高めても，

(14') あんなにかわいい秘書［サエ／*デサエ］いるいいご身分

(16') 時には，体長２メートルもある大きな熊［サエ／*デサエ］出るという僻地

のように，デサエはなじまない。(52)-(54) では，既定性／所与性というだけでなく，〈行為の対象となる〉〈それに対してどうするかが問題となる〉ということがきいているのだと見られる。

８．周辺的な用法のサエ ——〈累加〉と〈十分条件性の強調〉

以上，４-５節で確認した《P対照ならサエ，N対照ならデサエ》という基本原理［Ⅱ］と，６-７節の補足とで，ガ格・ヲ格をとりたてた〈極限提示〉〈類推〉用法のサエとデサエの使い分けについてはカバーできると思われるが，サエにはこのほか，

(55) 強風と戦っているところへ，雨［サエ／*デサエ］降り出した。

(56) 今日は次々人が来て忙しかった。鈴木さんが来て，田中さんが来て，山田さんが来て，しつこいセールスマン［サエ／*デサエ］来た。

のような〈累加〉の用法もある[18]。〈累加〉の用法では，デサエではなくサエしか使われない。

この用法は《（……だけでなく）こういうことサエ加わる》といったものだが，それに心情を伴う点が特徴である。(55) では「話手（または当事者）の心情としては風だけでも嫌だったところへ雨がさらに加わった」という趣をサエがあらわしている。(56) の「しつこいセールスマン」は本来の来客とは性質の異なるもので，「(そんなことまで起こらなくてもよさそうなものだが) そんなことまで，おまけ／だめ押しとして起こった」という趣である。一般的に述べれば，《ある事柄に対して話手（当事者）が何らかの心情をもっていたところへ，それと同傾向の事柄がさらに加わるに及び，それによって一層その心情が強まる趣をあらわす》とでもいえよう[19]。

〈累加〉の「XサエY」は，〈(問題の文脈で)“X－Y”の結びつきが起こる必然性／ふさわしさが低い〉という点では，これまで見てきた〈極限提示〉の用法と通う点があるが，細かい違いもある。すなわち，〈極限提示〉の用法では，当該の事柄は〈何らかの尺度における極限〉として捉えられ，その尺度——それが概略どのような尺度であるかということ——も，極限性も，聞手に見てとれた。ところが，〈累加〉の用法では，サエで述べられる事柄は〈話手が自らの体験を，ある方向への心情を高めながら継時的に述べる場合に，（主観的に）到達点として捉えられる事柄〉という趣であり，必ずしも客観的な形で見てとれる尺度があるわけではない。

その意味で〈極限〉というより〈到達点〉であるが，〈極限提示〉のサエの場合にその極限性が見てとれることが必要であったように（前掲［Ⅳ］），〈累加〉のサエの場合も，その〈到達点性〉（それが到達点であること）が見てとれることが，文が成り立つための必要条件である。そのためには，〈累加〉のサエの文では一般に文脈が必要である。かりに上の二例の前段を除いて

(55’) 雨サエ降り出した。

(56’) しつこいセールスマンサエ来た。

という部分だけが示されたとしたら，聞手としては一種の〈説明不足感〉をもつであろう（この事情は，先の(38) (40) (42) で極限性が見てとれない場合の違和感に通うものである）。(55) (56) のように，前段――〈到達点〉に至る〈途中の段階〉――を示してこそ，当該のサエの文が〈到達点〉だということが聞手にも見てとれ，〈累加〉の用法のサエの文として成り立つのである。尺度が必ずしも明瞭な形で見てとれないため，文脈を伴って初めて成立するわけである。

〈極限提示〉と〈累加〉の用法の違い，および，〈累加〉ではサエしか使われないことを，

(57) A君(デ)サエ落ちた。

という例で確認しよう。〈極限提示〉の用法は，たとえば高校の先生が

(58) P大学は難関だ。A君(デ)サエ落ちた。

と述べるような場合である。この場合，A君は「教え子の中の秀才」という〈極限的〉なものと捉えられている。(58) では，N対照の解釈は問題なく成立し，デサエは明らかに使えるが，一方，固有名詞でも「A君＝秀才」という了解が共有されていてP対照の解釈も可能だとすれば，サエも使えよう（注9・10参照）。(58) は，極限性さえ見てとれれば成立するので，「A君ほどではないC君やB君がA君に先立って落ちた」という〈途中の段階〉は必ずしも必要ではない。

一方，〈累加〉の用法は，たとえば

(59) C君もB君も落ち，その上A君サエ落ちた。

のように〈途中の段階〉があって（述べられているか，了解されていて），それを受けての〈累加〉として述べられる。(59) では，A君は〈極限的〉な秀才だとは限らない。この先生の教え子で大学を受けたC君もB君もともに失敗した上，俳優の学校を受けたA君サエ落ちた，ということかもしれない。さらにいえば，〈途中の段階〉は (59) に述べられているような内容ではなく，

(60) X家は不運が重なった。ご主人が失職し，奥さんが入院し，一家の頼みの綱である長男のA君サエ就職試験に落ちた。

ということかもしれないのである。A君が俳優学校を落ちた場合や (60) の場合，つまり明らかに〈極限提示〉ではなく〈累加〉の場合は「A君デサエ落ちた」とはいえないことに留意されたい。

以上，〈極限提示〉と〈累加〉の違いを見た[20]。もっとも，この両用法の区別は時に微妙であり，

(61) P大学は難関だ。C君もB君も落ち，学年トップのA君サエ落ちた。

のように，内容が〈極限的〉でかつ〈途中の段階〉もある場合は，〈極限提示〉〈累加〉両様に解せるのだが[21]，明らかに〈累加〉の場合はサエしか使えないことは以上で示せたと思われる。

ところで，〈累加〉の用法のサエの〈意味上のとりたての対象〉は，どう捉えられるか。

(55・再)〈強風と戦っている〉ところへ，〈雨サエ降り出した〉。

(56･再) 今日は次々人が来て忙しかった。〈鈴木さん〉が来て，〈田中さん〉が来て，〈山田さん〉が来て，〈しつこいセールスマン〉サエ来た。

のように捉えて，(55) はＰ対照，(56) は一見N対照と見られそうである。が，(55) はこれでよいものの，(56) の場合は，実は上述のように

(56'･再) しつこいセールスマンサエ来た。

という文だけが示されても，対照される内容は明確でなく，それが「鈴木さん（田中さん・山田さん）が来た」のように同じ「来た」という述語だという保証もない。

(56") 今日は次々厄介なことがあった。〈交通事故に巻き込まれ〉，〈子供が急病になり〉，〈しつこいセールスマンサエ来た〉。

ということかもしれないわけである（これは，先の (57) でサエを〈累加〉の用法で用いた場合，それが (59) のようなケースでなく (60) のようなケースかもしれないというのと同様である)。このように考えてくると，〈累加〉の用法では，(56) のように述語が揃っている場合でも，それはたまたま揃っているだけで，実質的にはＰ対照なのだ――つまり，〈累加〉の場合は，本質的には常にＰ対照である――と見るべきように思われる。

ちなみに，１節で〈十分条件性の強調〉と述べた

(6・再) 金［サエ／*デサエ］あれば解決する。

のような用法も，一見，「何があれば解決するか」という場合はN対照，「どんな条件が整えば解決するか」を問題にする場合はＰ対照と捉えられそうだが，おそらくそうではない。この用法は（かりにN対照のように見える場合でも）本来，他のあらゆる条件と対照して「しかじかの条件サエ満たされれば」ということなのだと見られ，やはり，本質的にはＰ対照と見るべきものであろう。この用法もサエしか使われないので，結局，以上をまとめて次のように整理できる。

［Ⅸ］〈累加〉および〈十分条件性の強調〉の用法はＰ対照であり[22]，常にサエを使う。

［Ⅸ］は，これまでは〈極限提示〉〈類推〉の用法について見てきた《Ｐ対照ならサエ，Ｎ対照ならデサエ》という基本原理［Ⅱ］とも符合し，［Ⅱ］の一部をなすことになる。

９．ガ格・ヲ格以外のとりたての場合

ガ格・ヲ格以外のとりたての場合も《N対照ならデサエ，Ｐ対照ならサエ》という原理自体は基本的に成り立つと見られる。ただし，細部に補足を要する点がある。場合に分けて見よう。

9.1. ト格・カラ格などのとりたての場合

ニ格・ヘ格・デ格は後回しにして他の格から見ていこう。ト格・カラ格などは，いわゆる“格の階層”が比較的低いため，とりたてに際し格助詞を残す必要があるが（これは，ハによる主題化の場合も同様)，当該格助詞の後に，やはり《N対照ならデサエ，Ｐ対照ならサエ》を使うのが基本的な原理だと見られる[23]。ト格・カラ格とともに，φ格（ニを伴わない時間表現等）や，格助詞として使われるマデの例も適宜あげよう（例文中の当該格助詞は平仮名で示す)。初めの４例はN対照，あとの２例はＰ対照と読むのが自然な例である。

(62)　今日(こんにち)φ［*サエ／デサエ］，進学を望む娘をおさえつけて嫁入りさせる親がいる。
(13-80/91-5)

(63)　僕は一人旅が好きだ。人との旅は疲れる。親友と［?サエ／デサエ］，旅はしたくない。
(53-36/86-12)

(4・再）北海道から［?サエ／デサエ］飛行機に乗れば一時間で着く。(11-82/91-8)

(64)　全部で十章ある本だが，第二章まで［?サエ／デサエ］，読むのに一か月かかった。
(46-45/73-25)

(65)　彼は，誰ともうまくいかない。親兄弟と［サエ／?デサエ］縁を切ったそうだ。
(70-19/59-33)

(66)　1969年のアポロ11号。人類はついに月まで［サエ／*デサエ］行くようになった。
(66-29/28-63)

《N対照ならデサエ，P対照ならサエ》という先の原理［II］が，基本的にはあてはまっていると見られる（(65) でデサエを可とする人が多かったのは，N対照とも解せるということだろう）。ただし，φ格以外の場合は，格助詞と，デサエのデとの重複を避けて，N対照の場合でも単に「当該格助詞＋サエ」としてしまう傾向もある（(63) (64)）。格助詞とデとの重複を避ける傾向／許す傾向がどのぐらい強いかについては個人差があろう。なお，(63) (4) (64) でサエも可とするなら，「ト格・カラ格などでは，N対照かP対照かを問わず，当該格助詞＋サエとする（N対照の場合は，当該格助詞＋デサエも併用できる）」というまとめ方もできることになる。

なおまた〈累加〉〈十分条件性の強調〉の用法の場合は，前述のようにP対照と見るべきもので，当該格助詞＋サエとなる。トの〈十分条件性の強調〉，カラの〈累加〉の例をあげる。

(67)　君と［サエ／*デサエ］一緒にいられれば，それだけで僕は幸せなんだ。

(68)　今日は変わったことの多い日だ。茶柱が立った。女房が，結婚して初めて私に「ありがとう」と言った。その上，あの筆不精の息子から［サエ／*デサエ］手紙が来た。

9.2. ニ格（・ヘ格）のとりたての場合

ニ格の場合も，基本的には同じだと見られるが，(a)「にデサエ」を避ける傾向が一層強い（避けて，単に「にサエ」とする）ことと，(b)「に」の種類によっては「に」の脱落が可能になる（ハによる主題化の場合と同様）こととが，ト・カラなどとの違いである。結果として，①N対照かP対照かを問わず，また「に」の種類にかかわらず「にサエ」は常に使える，②「に」の種類によっては，「にサエ」の他，「サエ」や，N対照の場合「デサエ」も使える，③人によっては，N対照の場合に「にデサエ」も許す[24]，と整理できる。幾つかの例をあげよう。

(69)　彼女はそのことをわびるどころか，恩［にサエ／*サエ／*にデサエ／*デサエ］着せた。

(70)　子供［にサエ／*サエ／??にデサエ／?デサエ］負けた。

(71)　コンビニ［にサエ／*サエ／??にデサエ／デサエ］あるものが，デパートにないとは！

(72)　世界中大抵のところには行った。南極［にサエ／サエ／??にデサエ／デサエ］行った。

まず，「に」の脱落しやすさの程度を見よう。ハによるとりたてでは「恩に着せる→恩［にハ／

*ハ］着せる」「あの子供に負ける→あの子供［にハ／*ハ］負ける」「あのコンビニにビールがある→あのコンビニ［にハ／ハ］ビールがある」「南極に行く→南極［にハ／ハ］行く」；話し言葉での動詞の直前では「*恩着せる」「*あの子供負ける」「*あのコンビニある」「南極行く」で，「に」の脱落しやすさは (69) (70)＜(71)＜(72) である。これを確認した上で，個々に見よう。

(69)は，Ｐ対照で，脱落できない「に」なので，「にサエ」しか使えない。

(70)は，やはり脱落できない「に」である。Ｐ対照ととれば，(69)と同様「にサエ」となるが，Ｎ対照ともとれるケースである。その場合，一般に「にデサエ」は避けられ，やはり「にサエ」となるが，人によっては「デサエ」も許容するかもしれない[25]。

(71)はＮ対照なので，いわば本来は「にデサエ」のはずだが（これを可とする人もあろうが），やはり「に」とデの重複を避け，「にサエ」または「デサエ」となる。(70)と違って脱落しうる「に」なので，「にデサエ」の「に」が落ちた「デサエ」も使えるのだと見られる。

(72)は，Ｐ対照ととるのが自然で，脱落しやすい「に」であるため，「にサエ」も「サエ」も使える。Ｎ対照と見れば「デサエ」も可である。

(73)　子供［にサエ／サエ／??にデサエ／デサエ］できる仕事だ。

は，基の格として「子供［に／が］できる」の両方が想定でき，また，Ｐ対照／Ｎ対照の両解釈可能である。「に」自体は脱落しにくいはずだが，「サエ」（Ｐ対照）・「デサエ」（Ｎ対照）が使えるのは，基の格が「が」の場合に基づくと見られる。

なお，〈累加〉〈十分条件性の強調〉の場合はＰ対照で，「にサエ」となる。「デサエ」は使えない。「に」の種類によっては「サエ」ともなる。(74) は〈累加〉，(75)は〈十分条件性の強調〉で，このうち(75)は脱落しうる「に」の例である。

(74)　今日は嫌なことばかりあった上，大雨［にサエ／*サエ／*にデサエ／*デサエ］遭った。

(75)　ローマ［にサエ／サエ／*にデサエ／*デサエ］行けば，ほかの街へは行かなくていい。

なおまた，へ格は，微妙な語感の差を別にすればニ格で言い換えがきく。つまり，へ格の守備範囲はニ格の守備範囲の一部として含まれる。そのためか，（“格の階層”がどれほど高いのかはともかくとして）やはり「へデサエ」を避ける傾向が強い。また，「へ」との言い換えがきく「に」（「……［に／へ］行く」などの「に」）は脱落可能な「に」であり，「へ」の場合も，

(72’)　世界中大抵のところへは行った。南極［へサエ／サエ／??へデサエ／デサエ］行った。

(75’)　ローマ［へサエ／サエ／*へデサエ／*デサエ］行けば，ほかの街へは行かなくていい。

のように，脱落可能な「に」に準じた結果となる（もっとも(72’)(75’)で「サエ・デサエ」の場合は，実は「へ」でなく「に」の脱落と見るべきかとも思われるが，この点は問わずにおく）。

9.3. デ格のとりたての場合

デ格の場合は，Ｎ対照かＰ対照かを問わず「でサエ」となる。Ｎ対照でも，

(76)　安物の筆［でサエ／*サエ／??でデサエ］見事な字を書く。いい筆ならなおさらだろう。

のように「でデサエ」は避け（一部に可とする人もいるかもしれないが），「でサエ」とする。

(77)　Ａ球場［でサエ／サエ／*でデさえ］大声援があったのだから，Ｂ球場ではなおさらだ。

の「で」は，実は主題化の際に落とせるもので（「A球場で声援がある→A球場［でハ／ハ］声援がある」），したがって（77）では，N対照ながらサエも可能になる。

(78)　人はいろいろなことを覚悟しなければならない。たとえば，非常時には丸腰［でサエ／*サエ／*でデサエ］戦わなければならない。

はP対照である。(76)-(78) の「で」は，デサエのデではなく格助詞と見るべきものである。

9.4.「……の」のとりたての場合（および 9.1-9.4のまとめ）

(79)　X君［*サエ／デサエ］作品が入賞したというのに，Y君は落選した。

(80)　P大学［*サエ／デサエ］学生の就職は難しい。

(81)　P大学の学生［*サエ／デサエ］就職は難しい。

(82)　五年勤めたAさん［*サエ／デサエ］送別会をしなかったんだから，半年で辞めるBさんの送別会どころではない。

などは，「……の」のとりたて（(79) の基の形は「X君の作品が入賞した」）である。これらはN対照と読むのが自然なケースで，サエではなく，デサエが使われる。

(83)　人は歳には勝てない。名人［サエ／デサエ］腕が次第に落ちていく。

ではN対照とともにP対照の読みも可能で，デサエもサエも使える（(79)-(81) でもP対照と見てサエを許す人もあろう）。なお，「……の」のとりたてで〈類推／極限提示〉用法の場合，「P対照の読みしかない（N対照としては読めない）」という場合は想定しにくいようだが[26]，〈累加〉〈十分条件性の強調〉の場合は，次のようにP対照としてのみ成立し，サエだけが使われる。

(84)　あの研究室のスタッフは皆どこか体が悪い。A教授は胃が弱い。B助教授は肝臓が悪い。C助手は糖尿だ。元気そうな秘書のD子さん［サエ／*デサエ］腰痛が重いそうだ。

(85)　医者［サエ／*デサエ］腕がよければ，病院の建物なんか古くてもいい。

9.1から9.4までの要点をまとめておこう。

［X］　ガ格・ヲ格以外の格のとりたての場合も，当該格助詞の後に《P対照ならサエ，N対照ならデサエ》という基本原理［II］が働いていると見られる。ただし，格助詞と，デサエのデの重複を避けるファクターが働き，N対照でも「当該格助詞＋サエ」となる場合も多い。また「に」「で」の一部では，格助詞の脱落がありうる。「……の」のとりたては，《P対照ならサエ，N対照ならデサエ》となる。

9.5. いわゆる断定の助動詞連用形の「で」などに付く場合

名詞句(＋格助詞)以外にサエが付く場合のうち，デサエと紛らわしいケースとして，国文法でいう断定の助動詞連用形「で」や，その類のもの（形容動詞や助動詞「ようだ」「そうだ」等の連用形活用語尾「で」）にサエが付く場合がある。例をあげておこう[27]。

(86)　私にとっては，彼は友達でサエないのよ。恋人だなんてとんでもないわ。

(87)　二人は夫婦であり，会社では同僚であり，そもそも幼なじみでサエある。

(88)　結婚相手は，お金持ちでサエあれば，誰でもいいわ。

上から順に〈極限提示／類推〉〈累加〉〈十分条件性の強調〉の用法である。「で」は，いずれもとりたてられる前からの「で」であり，見かけはデサエだが，実は「で＋サエ」である。

9.6. その他の語句に付く場合

名詞句（＋格助詞）以外にサエが付く場合は，本稿冒頭にも述べた通り，一般にデサエではなくサエが使われる（上記9.5.もこの一般化に含めてよいことになる）。たとえば，

(5・再) 横綱を投げ飛ばし［サエ／*デサエ］する。（動詞連用形＋サエ＋する）

(89) 涙を浮かべて［サエ／*デサエ］いる。（動詞テ形＋サエ＋いる）

(90) あまりに美しくて，憎らしく［サエ／*デサエ］ある。（形容詞連用形＋サエ＋ある）

などではサエしか使えない。実はこれらはＰ対照なのでデサエが使えないのだと見られる。

(91) ゆっくりと［サエ／デサエ］進まない。(61-29/49-46)

(92) 近道を通って［サエ／デサエ］一時間かかった。(56-34/64-24)

(93) 食事をしながら［サエ／デサエ］仕事のことが頭を離れない。(26-65/84-15)

は，副詞（句）に付く場合で，Ｐ対照とも読めるし，直前の語句を〈意味上のとりたての対象〉としている（いわばＮ対照[28]）とも読める場合だが，これらではサエ／デサエともに使える（したがって，「『名詞句（＋格助詞）』以外に付くときは，常にサエ」ともいえないことになる）。もっとも，副詞（句）に付く場合でも，

(94) 新興企業ながらＡ社の成長はすごい。ぐんぐんと［サエ／*デサエ］伸びてきた。

(95) じっくりと［サエ／*デサエ］取り組めば，必ずいい卒論になる。

のように，述語全体を〈意味上のとりたての対象〉とするＰ対照の場合は，デサエは使えない（(95)は〈十分条件性の強調〉の用法）。ここまでは本稿の想定する基本原理［Ⅱ］に合っているが，形容詞・形容動詞の連用形や一部の副詞の場合は，Ｎ対照と（も）とれる場合でも，

(96) 「手をけがして字が書けないんだ」「きたなくてもいいよ。書いてくれ」「きたなく［サエ／?デサエ］書けないんだ」(54-38/52-41)

(97) 「へたでもいいよ。書いてくれ」「へたに［サエ／?デサエ］書けないんだ」(72-24/45-48)

(98) そういえば，あの人の噂は，最近はちらほらと［サエ／?デサエ］聞かなくなった。(71-22/41-49)

のように，やはりサエのほうがなじむ場合もある。

結局，現象的には「名詞句（＋格助詞）以外に付く場合，一般にサエなら問題なく使われる。ただし，一部の副詞（句）に付くＮ対照の用法では，サエとともにデサエも使える」とまとめられ，また，先の基本原理［Ⅱ］との関係を求めれば，次のようにまとめることもできよう。

［XI］ 名詞句（＋格助詞）以外に付く場合も，《Ｐ対照ならサエ，Ｎ対照ならデサエ》という基本原理［Ⅱ］に，本質的には従う。ただし，形容詞・形容動詞の連用形や一部の副詞に付く場合は，Ｎ対照でも，デサエよりもサエが好まれる。

10．むすび；とりたての研究の中での本研究の位置

以上，サエ／デサエの使い分けについては，ガ格・ヲ格・「……の」のとりたての場合，および「名詞句（＋格助詞）」以外に付く場合を通じて，《Ｐ対照ならサエ，Ｎ対照ならデサエ》という先の基本原理［Ⅱ］が働いていることが確認できた。ニ格以下や副詞などのとりたての場合は，やや変則的な面も生じるが，やはり本質的にはこの原理が働いていると考えられる。

以上を総合して，デサエのデは《直前の語句が〈意味上のとりたて（対照）の対象〉であることを明示する》もの，つまり，《直前の語句を形の上でとりたてているだけではなく，意味的にもそうであると示す》役割を果たすもので，そのためにサエの前にデを加えているのだと見られる。上述のように，とりたてには〈形と意味の不整合〉がありうるので，〈当該の文では，形と意味とが揃っているのだ〉と示す働きをデサエのデが果たしているといってもよい[29]。

なお，とりたての研究課題としては，各とりたて助詞について，(1) 3章で述べた〈形の上でのとりたての対象〉がNの場合，Ｐの場合のそれぞれにつき，文が成立するための条件，および，(2)〈意味上のとりたての対象〉がNの場合，Ｐの場合のそれぞれにつき，文が成立するための条件（また，これに関連して (1) と (2) の関係）を明らかにすることが，基礎的な課題として設定できよう。本稿は，サエとデサエの使い分けを明らかにする中で，幸い，《デサエがN対照，サエがＰ対照》という分担が認められることに関連して，本稿の一部（5-7節）では，（デ）サエについて上の (2)——N対照の文の成立条件，Ｐ対照の文の成立条件——をあわせて捉えることもでき，とりたての研究の中では，この点も一つの意義をもつといえるかと思う[30]。

注

1　サエ・デサエの文の可否の判断には個人差もある。本稿は筆者自身の内省に従って論を進める（各例文の可否の判断も筆者のものである）が，参考までに，一部の例文については，日本語を母語とする100人の判定結果を添える。（P-Q/R-S）のPは当該の文でサエを可（○）とする人，Qは否（×）とする人；Rはデサエを可とする人，Sは否とする人の数で，P+QやR+Sが100に満たない場合の残りは「わからない」（△）あるいは無回答である。筆者自身の内省は，ほとんどの項目で多数の人の判定と一致している。

2　寺村(1991,p.104)は「XサエP」について，〈Xは，Pで表わされる動作，できごと，状態などと，普通は結びつかない，あるいはめったに結びつかないものである〉という影をもつ，としている。

3　（デ）サエには「何（デ）サエ」のように疑問詞に続く用法がない。これは，［Ⅰ］のような性質をもつため，尺度上の特定の位置を示す必要があるためだろう。一方，モ・デモは本来極限性をあらわすわけではなく〈それに関してモ該当する〉ことをあらわすだけなので，「何(デ)モ」のように疑問詞に添えて〈任意のものがそれに該当する〉意をあらわす用法をもつ。

4　以上に述べた〈当該の事柄〉〈対照される事柄〉〈意味上のとりたての対象（N対照／P対照）〉の考え方は，沼田(1986)の〈自者〉〈他者〉〈スコープ（Nスコープ／Bスコープ）〉の考え方に負う点が大きい。ただし，本稿の〈意味上のとりたての対象〉と沼田の〈スコープ〉（沼田・徐(1995)では〈フォーカス〉）とは，それによって説こうとする目的も異なるし，完全に重なり合うかどうか，定かではない。本稿はこの問題の検討には立ち入らない。

5　市川(pp.10-11)には，本稿ふうにいえば「サエはN対照の場合およびP対照の場合に使われ，デサエはN対照の場合に使われる」という趣旨の観察がある。本稿の分析とは部分的に重なるが，本稿はこのうち後段は支持するものの，前段については異なる分析をとるわけである。

6　ただし，(16) はN対照の解釈も不可能ではないので，デサエを可とする人がいるのだろう。

7　市川(pp.5-6)には，二つのものA，Bが

　　Aデサエ……から，Bは……(本稿 (3) はその例)，

　　Aデサエ……のに，Bは……(本稿 (26) はその例)，

　　Aデサエ……し (接続助詞)，Bも……

などの形で並列的に示される場合は，デサエが好まれるという指摘がある。本稿の分析としては，これは《N対照ではデサエが使われる》ということの帰結として説けることである。

8　ただし，(24) はP対照の読みも不可能ではないとも見られ，サエも許容されうる。

9　ただし，「ヒロシ」がたとえば「一回り下の末弟」だと当事者間で了解されていれば，(38)でサエを許す人もあろう (下の (40) (42) も同様)。この点には個人差があると思われる。

10　市川(p.9)は，氏の収集例中には，名前 (固有名詞)・代名詞の後にはデサエが付く例だけで，サエが付く例はなかったと報告している。これらの後でサエが概して成り立ちにくいことは，以上の本稿の分析と符合する。ただし，固有名詞でも，たとえば「イチローサエ簡単に打ち取られた。(あの投手は絶好調だ)」のように，〈名前も属性もよく知られた人物に関してある事態を述べることが，その極限性を十分に物語ることになる〉場合は，サエも使いやすくなる。また，「あんなNサエ」の例が氏の収集例中になかったとされるのは偶々そうだっただけと見られ，たとえば「あんな若造サエ車を持っている」は，属性が読みとりやすいため，自然である。

11　文によっては(11”) (44’) のように形の上でPをとりたてた述べ方が成立しにくい場合もある。たとえば「高熱サエある」(前出 (13)) を「? 高熱がありサエする」とすると許容度が落ちるし，「平仮名サエ読めない」に比べ「? 平仮名を読みサエできない」「? 平仮名が読めサエしない」は不自然 (注30も参照)。また「雨マデ降った」はよいが「* 雨が降りマデした」は不可。

12　市川は，「蛍デサエこの淵の上にだけ大きな鬼蛍が飛び交うと言うのも (下略)」(宮尾登美子『櫂』，市川(29)) のように，特定の格に還元できない超格的なデサエがあることを指摘し，この点でハに似ていると見る。興味深い指摘である。また丹羽は，上述のように存在の文では一般にデサエが使われにくいことを指摘するとともに，「車デサエ家の中に置いてある」などではデサエが使えるとして，これらから，デサエは主題提示の性格をもつと見る。

13　なお，これらではP対照の解釈 ((49) なら「子供が知っている」という句全体で人間の知識や知的活動という尺度の極限と見ること) も無理ではなく，人によってはサエも許す。

14　N対照と解せない場合は，先の (17) が示すように，主題性があっても——すなわち主題性の有無にかかわらず——サエしか使えない。

15　(49) と (51) のサエの文どうしの許容度を比べるアンケートを行ったところ，60人中，(49) のほうがよい (＝筆者の内省と同じ) 20人，(51) のほうがよい4人，同程度によい６人，同程度によくない30人であった。(51) のほうがサエが許されにくいことがほぼ確認できたといえよう。

16　〈他の何か〉との対照ではないという事情は，少しずつ異なる。(52) は，「普通の方法で切符を集めるにとどまらず」という趣旨の文であるため；(53) は，「盗む」対象は「他人の物」に決まっているため；(54) は，「約束を破る」で一つの意味をなし (また「約束」は「かわす」ものに決まっている)，「規則を破る」などと対照させても意味がないためである。

17　先の (19’)「医者からもらった薬［サエ／デサエ］飲まない」も連体修飾語句の付加によってデ

サエが使えるようになる例だが，(19') の場合は連体修飾語句が付くことでN対照の解釈が自動的に成立する（ここでいうN対照化ではない）のに対し，(52)-(54) では，連体修飾語句の付加で既定性／所与性が高まり，それが［Ⅷ］と相俟ってN対照化を派生する点が異なる。なお，市川(pp.7-8)にも，違う観点からではあるが，デサエが連体修飾節とともにあらわれやすいという傾向の指摘がある。もっとも，先に見た (39) (41) (43) アでは「一回りも下の」「入社後間もない」「あの温厚な」のような連体修飾語句の付加がP対照の読みの成立（サエの使用）をたすけるので，連体修飾語句の付加が常にデサエをあらわれやすくするともいえない。

18　この〈累加〉の用法を，先の（＝本稿のいう〈極限提示／類推〉の）用法から区別することは，国文法系の文献ではよく見られるが，最近の日本語学系の文献ではあまり見られない。が，以下明らかになるように，これらはやはり区別すべきものだと思われる。ちなみに，古語では「さへ」が〈累加〉をあらわし，「だに」「すら」が〈極限提示／類推〉に使われていたとされる。

19　「?? 関西各地に行った。神戸に行き，大阪に行き，京都にサエ行った」のように，ただ客観的に並立する（今本文で述べたような心情を伴わない）場合の累加には，サエはなじまない。

20　なお，マデは，簡単にいえば〈程度がそこマデ（＝しばしば，期待される以上のところマデ）及んでいる〉ことを述べる表現であり，

①（a）降格処分［マデ／*サエ］受けたが，クビにはならなかった。

（b）去年は全国で500位だったのが，今年は300位に［マデ／*サエ］なった。

のように，〈極限的な事柄〉とは限らないことが〈極限提示〉のサエとの違い，

②　当該の文単独でも使いやすいことや，次の (c) のように，“それだけでも十分……なのに”という心情を伴わない場合にも使えることが，〈累加〉のサエとの違いである。

（c）最近は女の子［マデ／*サエ］「僕」と言う。

〔(d) 最近は女の子［マデ／サエ］「チキショー」と言う。

なら“男の子が言うにしてもよくない言葉なのに”の趣で〈累加〉のサエが使えるが，(c) では，男の子が「僕」と言うのは当たり前なので〈累加〉のサエは使えない。マデは (c) (d) とも可。〕

21　ただし，(61) でサエではなくデサエを使った場合は〈極限提示〉と見られる。

22　ただし〈累加〉〈十分条件性の強調〉の用法では，P対照だが，先の［Ⅳ］は要求されない（〈累加〉の場合に，かわりに〈到達点性〉が見てとれる必要があることは前述の通り）。

23　なお，ヲ格のとりたてでは「体をこわす→体サエこわす」のように一般に格助詞「を」は残らないが，稀には「悪寒をサエ感じた」（井上靖『崖』。寺村 p.100,例(297)）のように「をサエ」の実例も見出せる。寺村のあげる「をサエ」の実例５例はいずれもP対照である。

24　丹羽(p.38, 例㉞b)は，「にデサエ」の実例として「同じ日本人にでさえ，心身に多少でも障害があれば，異質扱いしてしまいます」（朝日新聞 92.2.10）をあげている（ただし，この文は係り受けが整っていない一種の悪文である）。

25　もっとも，その場合は「相手が子供でサエ負けた」（で＝断定の助動詞）の意かもしれない。

26　たとえば「大学の教師が悪いことをする世の中」を，P対照の趣旨で（＝「万人が立派な生き方をする世の中」や「役人が賄賂をもらう世の中」などと対照し，“最高学府の教育者が悪いことをするのでは世も末だ”という趣で）サエでとりたてようとして，「……の」の部分すなわち「大学」だけにサエを付けて「*大学サエ教師が悪いことをする世の中」とすることは，できない（「大学の教師［サエ／デサエ］悪いことをする世の中」や「A大学［サエ／デサエ］教師が悪いことをした」は可だが，これらはP対照とともにN対照とも解せる場合である）。

27　例は断定の助動詞に限り，今「その類のもの」と呼んだものは省くが，事情は全く同様である。

28　ここでは〈N対照〉を〈直前の語句を〈意味上のとりたての対象〉とする〉意に拡張して使う。

29　デサエのデは本来「デアッテ」の意とされ(此島1966,p.285)，以上の見方はこれとも符合すると見られる。

なお，モ対デモも（この場合は，モ自体にP対照・N対照両用法がある点はサエの場合と異なるが），やはりデモのデには《直前の語句が〈意味上のとりたての対象〉であることを明示する》面がありそうである。たとえば（ｉ）「平仮名モ読めない」，（ii）「*平仮名デモ読めない」，(iii)「簡単な平仮名デモ読めない」というデータは，“（ｉ）はP対照の文として成り立つ。（ii）は，デモがN対照で，かつ(デ)モが(デ)サエと異なり極限性を本義としない（注3）ため，〈平仮名ナラ読めるか〉を問題にする文脈がない限り不自然。(iii) は，「簡単な」の付加で極限性が見えるため，N対照の極限性の文として成立する”と説ける。定延(1995,p.248以下)は，（ある用法の）デモのデは〈観察対象の指定を支援・強化する〉と見るが，これは，デサエ（・デモ）のデが《直前が〈意味上のとりたての対象〉であることを示す》と見る本稿の分析と通う面があろう。

なおまた，サエモ対デサエモも（これらには〈十分条件性の強調〉の用法がないが），サエ対デサエと並行的な面が強かろうが，筆者自身それほどは使わない表現なので，本稿の論述には含めなかった。また，スラ（モ）とデスラ（モ）の使い分けについては，おそらく，①サエ対デサエと（ほぼ）並行的である，②ただし，スラには〈累加〉〈十分条件性の強調〉の用法がない(したがって，〈極限提示〉〈累加〉用法についてのみ，サエ対デサエと同様の使い分けがある)，ということかと思われるが，筆者自身，スラ／デスラをあまり使わないので，立ち入らない。

30　ちなみに，(1) について，サエが形の上でもPレベルのとりたてをする（名詞句以外にサエが付く）文の成立条件を明らかにすることは存外難しい。注11で見たように，意味的にP対照であっても，形の上でPをとりたてたサエの文が成り立ちにくい場合があるからである。例を追加すると，(92)(93)などはP対照であっても，「*近道を通って一時間かかりサエした」「*食事をしながら仕事のことが頭を離れサエしない」とはいえず，「近道を通って一時間かかるという状態でサエあった」「食事をしながら仕事のことが頭を離れないという状態でサエあった」とでもしなければ落ち着かない。ここでは，こうした問題を指摘するだけにとどめる。

引用文献

市川 保子（1989）「「サエ」と「デサエ」――その構文と意味」『筑波大学留学生教育センター 日本語教育論集』4，1-17

菊地 康人（1997）「「が」の用法の概観」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房，左101-123

此島 正年（1966）『国語助詞の研究』桜楓社（1973増補）

定延 利之（1995）「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版，227-260

寺村 秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

丹羽 哲也（1995）「「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究』大阪市立大学，47/7，25-51

沼田 善子（1986）「とりたて詞」 奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社，105-225

沼田 善子・徐 建 敏（1995）「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版，175-207

付　記

編集委員会と査読者から有益な助言を得て，論を当初の稿よりも適切に構成し直すことができた。深く感謝する。

（投稿受理日：1998年７月15日）
（改稿受理日：1999年６月11日）

菊地　康人（きくち やすと）
東京大学 留学生センター　113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

Japanese Linguistics 6 (October, 1999) 7-31 〔Article〕

Distinction between focus particles *sae* and *desae*

KIKUCHI Yasuto
The University of Tokyo

KeyWords

sae, desae, target of contrast, P-level contrast, N-level contrast

Abstract

This paper clarifies the distinction between *sae* and *desae.* Although both *sae* and *desae* are focus particles of the meaning of 'even', their semantic focuses, or targets of contrast, differ. The focus of *desae* is limited to the preceding NP (N(oun phrase)-level contrast), with *de* functioning as an explicit marker of focus. On the other hand, the focus of *sae* is a larger phrase containing it, whose head is predicate (P(redicate phrase)-level contrast).

These hypotheses explain the following examples adequately.

(a) *Boku* [**sae/desae*] *tsukareta noda kara, kimi wa donnani tsukareta koto daroo.*
(Even I am exhausted. How tired you must be!)

(b) *Kanojo no kao niwa namida* [*sae/*desae*] *ukandeiru.*
(Even tears are gathering on her face.)

In (a), the speaker compares two noun phrases '*boku* (I)' and '*kimi* (you)' and says, "Even '*boku* (I)' satisfies x of 'x *ga tsukareta* (x is tired). ' Therefore, it is natural that '*kimi* (you)' also satisfies x." This is a case of N-level contrast. In such a case *sae* is not used and *desae* is used.

In (b), we cannot imagine 'x *ga ukandeiru* (x are gathering)' for x other than '*namida* (tears)'. The total phrase '*namida sae ukandeiru* (tears are gathering)' expresses extremity of feeling, compared with other possible degrees of feeling. This is a case of P-level contrast. In this case *sae* is used and *desae* is not used.

In some sentences where the interpretations of P-level contrast and N-level contrast are both possible, both *sae* and *desae* can be used.